ソフトバンクグループ株式会社

2026 年 3 月期 第 2 四半期 決算説明会

質疑応答

2025 年 11 月 11 日

免責事項

本資料は、ソフトバンクグループ株式会社（以下「SBG」）及びその子会社（以下 SBG と併せて「当社」）並びに関連会社（以下当社と併せて「当社グループ」）に関する関連情報を提供するものであり、すべての法域において、いかなる証券の購入又は応募の申込みを含む、いかなる投資勧誘を構成又は形成するものではありません。証券の募集、購入の申し出の勧誘、又は証券の売出しは、1933 年証券法（その改正を含む。以下、「証券法」という。）の登録要件に従って行われます。本資料に含まれる情報は、証券法ルール 135 に従って記載されるものです。

本資料には、当社グループの推定、予測、目標及び計画を含む当社グループの将来の事業、将来のポジション及び業績に関する記述など当社グループの将来の見通しに関する記述、見解又は意見が含まれています。将来の見通しに関する記述には、特段の限定を付すことなく、「目標とする」、「計画する」、「確信する」、「希望する」、「継続する」、「期待する」、「目的とする」、「意図する」、「だろう」、「かもしれない」、「であるべきである」、「したであろう」、「できた」、「予想する」、「推定する」、「企図する」若しくは類似する内容の用語若しくは言い回し又はその否定形などが含まれています。本資料に記載されている将来の見通しに関する記述は、当社グループが本資料の日付現在において入手可能な情報を踏まえた、当社グループの現在の前提及び見解に基づくものです。これら将来の見通しに関する記述は、当社グループのメンバー又はその経営陣による将来の業績を保証するものではなく、当社グループのビジネスモデルの成功、当社グループの資金調達力及びその資金調達条件の影響、SBG の重要な経営陣に関するリスク、当社グループの投資活動に関する又はこれに影響を与えるリスク、SB ファンド（下記で別途定義）並びにその投資、投資家及び投資先に関するリスク、ソフトバンク株式会社及びその事業の成功に関するリスク、アーム及びその事業の成功に関するリスク、法令・規制・制度などに関するリスク、知的財産権に関するリスク、並びに訴訟を含むこれらに限られない既知及び未知のリスク、不確実性その他要因を含み、これらの要因により、実際の当社グループの実績、業績、成果又は財務状態は、将来の見通しに関する記述において明示又は黙示されている将来の実績、業績、成果又は財務状態と著しく異なる可能性があります。当社グループの実績、業績、成果又は財務状態に影響を与える可能性のあるこれら及びその他の要因については、SBG のホームページの「事業等のリスク」（https://group.softbank/ir/investors/management_policy/risk_factor）をご参照下さい。当社グループ及びその経営陣は、これら将来の見通しに関する記述に明示されている予想が正しいものであることを保証するものではなく、実績、業績、成果又は財務状態は、予想と著しく異なる可能性があります。本資料を閲覧する者は、将来の見通しに関する記述に過度に依拠してはなりません。当社は、本資料に記載される将来の見通しに関する記述その他当社が行う将来の見通しに関する記述を更新する義務を負いません。過去の業績は、将来の実績を示すものではなく、本資料に記載される当社グループの実績は、当社グループの将来の実績の予測若しくは予想の指標となるものではなく、又はこれを推定するものでもありません。

本資料に記載されている当社グループ以外の企業（SB ファンドの投資先を含みますが、これに限られません。）に関わる情報は、公開情報等から引用したものであり、当社は、情報の正確性又は完全性について保証するものではありません。

商標について

本資料に記載されている企業、製品及びサービスの名称は、各企業の商標又は登録商標です。

重要なお知らせ―SBG の普通株式の取引、スポンサーなし ADR（米国預託証券）に関する免責事項

SBG の普通株式の売買を希望する場合には、当該普通株式が上場され、主に取引が行われている東京証券取引所において売買を行うことを推奨します。SBG の開示は、スポンサーなし ADR（以下「ADR」）の取引の促進を意図するものではなく、ADR の取引判断を行う際にこれに依拠すべきではありません。SBG は、SBG の普通株式に関するスポンサーなし ADR プログラムの設定又はそれに基づき発行される ADR の発行若しくは取引について、過去及び現在において、参加、支援、推奨その他同意を行ったことはありません。SBG は、ADR 保有者、銀行又は預託機関に対して、(i)SBG が 1934 年米国証券取引所法（以下「証券取引所法」）で定めるところの報告義務を負うこと、又は、(ii)SBG のホームページに、SBG が証券取引所法ルール 12g3-2(b)に従って証券取引所法に基づく SBG の普通株式の登録の免除を維持するために必要な全ての情報が継続的に掲載されることを表明するものではなく、また、当該者又は機関は、そのように信じてはなりません。適用ある法が許容する最大限の範囲において、SBG 及び当社グループは、SBG の普通株式を表象するスポンサーなし ADR に関連して、ADR 保有者、銀行、預託機関その他企業又は個人に対するいかなる義務又は責任を否認します。

上記の免責事項は、ソフトバンク株式会社や LINE ヤフー株式会社などの、スポンサーなし ADR プログラムの対象であるか又は将来対象となる可能性のある当社グループの証券に同様に適用されます。

本資料に記載されるファンド情報に関するお知らせ

本資料は、情報提供を目的として提供されるものであり、法律上、税務上、投資上、会計上その他の助言又は SB Global Advisers Limited（以下「SBGA」）、SB Investment Advisers (UK) Limited（以下「SBIA」）及びそれらの関係会社を含む SBG の子会社（以下併せて「SB ファンド運用会社」）により運用されるいずれかのファンド（文脈に応じて、パラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークルと併せて「SB ファンド」）のリミテッド・パートナーシップ持分又は同等の有限責任持分の販売の申込み又は申込みの勧誘を行うものではなく、また、いかなる方法でもそのように依拠してはなりません。疑義を避けるために付言すると、SB ファンドは、他のファンド同様、 SBIA とその関係会社によって運用されている SoftBank Vision Fund L.P. （文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークルと併せて以下「ビジョン・ファンド 1」）、SBGA とその関係会社によって運用されている SoftBank Vision Fund II-2 L.P. （文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークルと併せて以下「ビジョン・ファンド 2」）及び SBGA とその関係会社によって運用されている SBLA Latin America Fund LLC （文脈に応じて、あらゆるパラレル・ファンド、フィーダー・ファンド、共同投資ビークル又はオルタナティブ投資ビークルと併せて以下「ラテンアメリカ・ファンド」）を含みます。

SB ファンド（ビジョン・ファンド 1 及びビジョン・ファンド 2 並びにラテンアメリカ・ファンドを含む）、SB ファンド運用会社、SB ファンド運用会社により運用される後続又は将来のファンド、SBG 又はそれぞれの関係会社のいずれも、本資料に記載されている情報の正確性又は完全性について、明示又は黙示であるとにかかわらずこれを表明又は保証するものではなく、また、本資料に記載されているパフォーマンスに関する情報は SB ファンドその他本資料に言及される企業の過去若しくは将来のパフォーマンス又は SB ファンド運用会社により運用される後続ファンド、将来組成されるファンドの将来のパフォーマンスについての確約又は表明として依拠してはなりません。

SB ファンドその他本資料に言及される企業のパフォーマンスに関する情報は、背景説明のみを目的として記載されるものであり、関連する SB ファンド、本資料に言及されるその他のファンド又は SB ファンド運用会社により将来運用されるファンドの将来のパフォーマンスを示すものとして考慮されるべきではありません。SB ファンドの特定の投資対象に関する情報への言及は、それに含まれる範囲において、関連する SB ファンド運用会社の投資プロセス及び運用方針を説明することのみを目的として述べられたものであり、特定の投資対象又は証券の推奨として解釈してはなりません。SB ファンドのパフォーマンスは各個別の投資においてそれぞれ異なる可能性があり、個別に言及した取引のパフォーマンスは、必ずしも全ての適用される従前の投資のパフォーマンスを示唆するものではありません。本資料において記載及び説明される特定の投資は、関連する SB ファンド運用会社が行う全ての投資を示すものではなく、本資料において記載及び検討される投資が利益を生んだ又は将来利益を生むと仮定すべきではありません。

本資料に記載される SB ファンドのパフォーマンスは、ポートフォリオ投資の未実現の評価額に基づくものです。未実現の投資評価額は、関連する SB ファンド運用会社がそれぞれ特定の投資に関する状況に基づき合理的とみなす前提及び要因（例えば、評価日現在における類似の会社の平均株価収益率その他勘案事項等を含みます。）に基づくものです。しかしながら、未実現の投資評価額が本資料に記載されている金額又は本資料に記載されているリターンを算定するために用いられる金額で実現されるという保証はありません。また、かかる実現に関連する取引費用が未知であるため、当該取引費用は、かかる算定に含まれません。未実現額の見積りは、常に変化する多くの不確定要素の影響を受けます。関連する SB ファンドの未実現の投資に対する実際の実現リターンは、いくつか要因がある中で特に、将来の運用実績、処分時の資産価格及び市況、関連する取引費用並びに売却の時期及び方法によって決まるものであり、これらの要因は全て、関連する SB ファンド運用会社の評価の根拠となった前提及び状況と異なる可能性があります。

過去のパフォーマンスは、必ずしも将来の実績を示すものではありません。SB ファンド又は SB ファンド運用会社により運用される将来のファンドのパフォーマンスは、本資料に示されるパフォーマンス情報よりも大幅に低くなる可能性があります。各 SB ファンド又は関連する SB ファンド運用会社により運用されるいずれか将来のファンドが、本資料に示される実績と同等の実績を達成するという保証はありません。

本資料に記載される第三者のロゴ及びベンダー情報は、説明目的のためにのみ提供されるものです。かかるロゴの記載は、かかる企業又は事業との提携又はその承認を示唆するものではありません。SB ファンド運用会社、SB ファンドのポートフォリオ会社、SB ファンド運用会社により運用される将来のファンドの将来のポートフォリオ会社、又は SBG が、本資料に記載されるロゴを有する企業又は事業のいずれかと今後業務を行うという保証はありません。

SBGA 及び SBIA は、ビジョン・ファンド 1、ビジョン・ファンド 2 及びラテンアメリカファンドの運用に関して、相互に SBG からそれぞれ別個独立した業務プロセスを採っています。SBGA 又は SBIA によって運用される SB ファンドは、それぞれ SBGA 単独又は SBIA 単独で運用されています。

質疑応答

質問者 1：先ほど、株価がダイナミックに動いているというお話がありましたが、昨今は特に御社の株価も含めて、AI 関連株の急騰、そして急落の幅が大きいことから、株式市場では、今 AI ビジネスはいったいどの段階にいるのだろうかという関心が投資家の間で高まっているかと思います。

株高、すなわち投資家の AI ビジネスに対する期待の膨らみというのは始まったばかりなのでしょうか。それとも、ある程度過大評価される部分も出てきて、注意深く見なければいけないのか、どちらなのでしょうか。

また、ソフトバンクグループ株式会社（以下「SBG」)の株価は、ここまで日経平均株価の上昇をかなり牽引してきたと思うのですが、OpenAI を含めて、投資先である AI 企業の評価額は妥当なのでしょうか。

相場は熱狂、いわば AI バブルのような状況にあるというリスクも指摘されるわけですが、そういったリスクはないのでしょうか。お考えをお聞かせください。

後藤 ：AI 技術の開発、サービスの展開がまさに今から進んでいこうというタイミングで、評価がどうなるかはもちろん難しいテーマですし、市場はまさにそれを先取りしたいと思って動いたり、先取りしすぎたかなと思って引いてみたり、という局面は歴史的に見ても都度あるのだろうと思います。

例えば、2000 年のネットバブルと言われた時期の数字がネットバブルだったというのは、後から評価できることだと思っていまして、25 年たった今では、あのバブル時の変動幅は、そんなに大変だったかというと、そうでもないわけです。

市場の自律した動きの範囲の中で、先取りしたり、後戻りしたりを繰り返していくのだろうと思います。市場規模が大きくなった今は、その幅も大きくなっていると思うのです。

われわれの場合は、投資会社としてマーケットを見ています。そして、投資先が AI の技術をどのようにリアルな価値に切り替えていけるかということを、投資を通じてサポートしているわけです。

バブルかどうかということについて、今は答えることができないと思っているのは、そういう背景です。きっと後で分かると思いますが、始まったばかりの技術に対していろいろな評価があるのは私は良いことだと思いますし、投資会社の財務運営として、そういった流れを私たちがどのように

守りを固めながら、投資機会を逸することがないように取り組んでいくかが、われわれにとって大事なことだと思います。

単純に今、行き過ぎじゃないかというような端的な質問になかなか答えるわけにはいきませんが、全体としてはそんなイメージを持っています。

質問者 1：つまり、今は投資しないリスクのほうが遥かに大きいと SBG として判断しているということですか。

後藤 ：これは人によってさまざまだと思います。ただ、当社はそのように思っています。

質問者 2：1 つ目ですが、Stargate Project の進捗について、9 月 24 日の発表によると、米国に 5 つのデータセンター拠点を設立して、3 年間で 4,000 億ドルの計画が固まったと、その 5 拠点のうち SBG と OpenAI が関係するのはオハイオ州のローズタウンとテキサス州のミラム郡の 2 拠点と読めたのですが、今後の進捗として、この 2 拠点を中心に SBG が関わっていくことになるのでしょうか。そうだとしたら、どういった計画でやっていくのかということと、今後、3 年で 4,000 億ドルのうち、SBG としての持ち出しはどのぐらいになりそうなのかということも含めて教えてください。

後藤：9 月の発表では 2 拠点､オハイオ州ローズタウンとテキサス州ミラム郡の案件を記載しています。

その後もいろいろ変化があり、まず、テキサス州の案件は、計画通りプロジェクトを進めています。規模感、スケジュール感は、このプロジェクトの概要を固めた段階で皆さんには披露したいと思います。まだその少し前の段階です。

オハイオ州は当初の計画から少し変更があり、今後の高性能コンピューティングの需要に対応するための AI インフラ向けの機器や装置の製造に特化していこうということで、かじを切っているところがあります。

一方で、これだけではなくほかにも本当に多くのサイト候補地を集めながら、今後の 2～3 年でどういう順番で取り組んでいくかということを今、準備、計画を進めているところです。金額も、プロジェクトの概要が固まった段階で、一つ一つのプロジェクトについてお話しさせていただきたいと思います。

質問者 2：2 つ目です。関連するかわからないのですが、トランプ米大統領が来日した際の晩餐会で発表された 5,500 億ドルの投資スキームについてです。SBG も電力インフラへの支援で参加希

望を表明されたということで、最大 250 億ドルという中身だったのですが、支援表明をするに至った経緯と、どういったプロジェクトを想定しているのかを、教えてください。

これだけを見ると、Stargate に絡む電力インフラを SBG としてやっていって、そこで最大 250 億ドルとも読めるのですが、こういった理解で合っているのか、教えてください。

後藤：こちらは、意向表明を示された他社も同じだと思うのですが、詳細はこれからきちんと詰めて、お話しできるタイミングで皆さんにお知らせしていきたいと思います。現時点ではまだお話するには、ちょっと早いタイミングかなと思っています。ご容赦いただければと思います。

質問者 3：ホークスの 5 年ぶりの優勝おめでとうございます。そして、株価もですが、やはり今年の秋はゴールデンオータムというか、最高なのではないか。まずそれを一つ伺いたいです。

それからロボットは孫さんが 20 年以上前から執念でやってきて、Pepper は必ずしもうまくいかなかった。もう 68 歳ですが、あえて ABB で勝負ということで、今どれぐらいまた燃え上がってロボットをやろうとしているのか。

また、先ほどのファナックとの比較ですが、やはりファナックはすごい会社で、ABB ロボティクスの売上規模はファナックの 3 分の 1 ぐらいだと思うのです。その割に人が多かったり、いろいろなところを見ると、たぶんテコ入れが必要なのだろうと思います。そこはロボットにかける孫さんの執念でリベンジロボットだと思うのですが、ASI との掛け合わせで、今どんな議論になっているのか、もうちょっと生々しく伺いたいです。

後藤：まず最初に、本当に、自分にとって今回の決算の数字と（ホークス優勝）合わせて、正直、こんなにほっとできる秋はないなということをしみじみと味わっています。一方で、孫さんはますます燃え上がっていますので、そこもちゃんと一緒に走っていかなければいけない。

ロボットについてはご推察の通りで、孫さんにとってロボットは本当に思い入れのある分野ですし、これまでもそうだったと思うのです。Pepper も非常にかわいいロボットで、あの取り組みがあったからこそ、ロボティクスの部分はここまで成長してきた。私はそう思いますし、今 ABB ロボティクスとの協業、そして、これから世界にどのように打って出るかは、それを考えるだけでたぶん、楽しくてしょうがない。そういう状況にあるのは、皆さんも想像に難くないのではないかと思います。

68 歳とはいっても、とてもそうは思えない。本当に彼のパッションは大変な熱量で、われわれがやけどするぐらいです。でも、私もちゃんと一緒に走っていこうと思っています。

質問者 4：まず 1 つ目ですが、OpenAI への追加出資について、10 月に追加のラウンドがあったというお話で、SBG も 14.5 億米ドルを追加で出されるということですが、出資の払い込み時期について、決まっていたら教えていただきたいです。あと、OpenAI には Microsoft という最大の株主がいますが、SBG として OpenAI の出資比率の目標はあるのでしょうか。

後藤 ：まず、10 月の投資については完了しています。われわれとしては、出資金額はそんなに大きな金額でもありません。

それから、目標となる持株比率というわけではないですが、私たちは OpenAI に対しておそらく最も強い期待を持っている会社の 1 つだと思います。多いに越したことはないと思いますが、今回、組織再編がいったん完成し、持株比率は 11%ということで、もちろん、われわれも納得した比率です。

質問者 4：2 つ目が Net Asset Value（以下「NAV」)です。9 月末で 33.3 兆円という数字ですが、そこから計算すると現時点で 1 株当たりの NAV が 2 万 3,300 円ぐらいになるかと。株式分割も発表されましたが、株価のディスカウントの考え方、プレミアムに入ったのか、その辺りの見方についても教えてください。

後藤：株価についてコメントするのは適切でないと思いますので、少し形を変えて申し上げますと、SBG が成長する材料はまだたくさん持っています。われわれの歴史がそうですが、やりたいことが常にたくさんある会社で、その全てが評価されているわけではなくて、場合によっては、ほとんどが評価されなかったり、結果的には大きなディスカウントが出てきます。

今後もたぶん、傾向としてはそういうことは続いていくのではないかとは思っています。そういうことで、われわれの将来、ぜひご期待いただければと思っています。

質問者 5：1 つ目は NVIDIA 株のことです。先ほど、保有資産活用の一環として売却したとおっしゃいましたが、10 月というタイミングで売却した理由や背景について、もう少しご説明をお願いします。OpenAI への投資に使われるためなのか、もしくは NVIDIA の株価のレベルに対するお考えが反映されたのか、教えてください。

後藤 ：私たちは、投資会社として、常に投資回収と新規投資を繰り返していく。それが宿命だと思います。われわれの保有アセットのうち、どういうアセットを、どういうアセットに乗り換えていくのかということはやはり常々考えていますし、おっしゃる通りだと思います。

今年、300 億米ドル以上にのぼる OpenAI への投資を行うわけですから、そのためには既存アセットのいくつかは、その対象として、調達に活用させていただくということです。

10 月に特別な意味があるかとか、NVIDIA がどうかということをコメントすべきではないと思いますし、その目的というのは、今、ご指摘のあった通りということです。

質問者 5：2 つ目なのですが、Stargate について、9 月の発表で、OpenAI と Oracle で決めた 4.5GW で 3,000 億米ドルに至る計画について、SBG は特に言及されていませんでした。こちらにはあまり関与しないという理解で間違いないでしょうか。

後藤 ：Stargate Project は、SBG と OpenAI、Oracle が、AI 向けのメガデータセンターをできるだけ早く整備していくというプロジェクトです。Oracle は Oracle で従来からデータセンターのビジネスはやっているわけです。

ですから、Oracle と OpenAI が組んでやる部分もあれば、私たちと OpenAI が組んでやるものもあれば、今後、3 社が同じプロジェクトに取り組むこともあるだろうと思います。Stargate Project はそのように広い解釈で進めていければと思っています。

質問者 6：1 つ目が、今回、決算の中でも大きく業績に貢献したのが OpenAI だったかと思うのですが、OpenAI の成長性について、後藤さんはどのように見ていらっしゃるかを率直にお聞かせください。

後藤：OpenAI の成長性について、やはり私たち、それから、皆さんにとって一番わかりやすいのは、彼らのサービス展開だと思うのです。ChatGPT を中心とする生成系 AI のサービスが他の同様のサービスプロバイダと比べてどういう立ち位置にあるかということで考えたときに、今、大変大きく水をあけてトップを走っているわけです。

もちろん他社も努力されていると思いますが、OpenAI もさらに努力をしていくわけです。これだけの差がついたサービス提供者のポジションは、そう簡単に崩れないでしょう。さらにサービスは研ぎ澄まされていくわけですから、OpenAI がこの領域にしっかり向き合って取り組んでいく限り、当面、OpenAI が一番強い立場にいるだろうということは、われわれも確信を持っています。

質問者 6：あと 1 点、先日 ABB のロボティクス事業の買収を発表されましたが、これまでも重点的に示していらっしゃるデータセンターだったり、電力の分野への投資もだいぶ進めてこられたと思います。今後の御社の投資方針として、まだ投資が足りない分野だったり、今後より重点的に力を入れて進めていきたい分野があれば教えてください。

後藤 ：これは難しいご質問で、先ほどスライドでお見せした四つの領域は、全てわれわれにとって重要な分野です。ここに入っていない分野でも、フィジカル AI を追求していくと、オートノマスドライビングであったり、ロジスティクスであったり、その他さまざまなマニュファクチャリン

グであったり、今後 AI がライフスタイルやワークスタイルを変えていく多くの領域が目の前にあるわけです。

そこでやはり、特に革新的なモデルや、ビジネスモデルとして素晴らしい企業群に対しての投資は、広く取り組んでいきたいという気持ちを持っています。資金的な限界もありますから、何でもかんでもではなく、厳選しながら、われわれにはまだやるべきことが多いと思っています。

質問者 7：御社に限らず、最近、株式市場で資産を持ち続けないで、常に買って売ってを繰り返すキャピタルリサイクリングを行う企業が、鉄道会社なども含めて増えてきています。資産を売って買う中で、御社のやり方がすごく優等生だという見方をする方が増えてきています。御社がうまいタイミングで売って買っているのには、どういった秘訣があるのか聞かせください。

後藤：やっている本人はそんなに上手にやっていない気がしていて。例えば、買うときに一番底値で買おうと思っても絶対無理です。売るときも、一番天井で売るのは無理なわけで。そこを考えるよりは、今、例でおっしゃったキャピタルリサイクリングを実際にやっている会社はいろいろあると思いますが、皆さん、それぞれ事業をお持ちの企業群だと思うのです。

われわれはちょっと珍しいのですが、自己勘定投資とファンド投資を両方やっている投資会社です。ですから、売り買いそのものがわれわれのメインビジネスになっているわけです。そうすると、新規投資と回収の関係、そして、それは常に同じタイミングでは来ないものですから、その間をつなぐのがレバレッジファイナンスです。これをうまく組み合わせて、成長させていくことを一生懸命考えている。その結果が、まずは現在かと思っています。

質問者 8：1 つ目は、今回アームの決算でソフトバンクグループ向けのライセンス売上が、7-9 月期は 1,780 万米ドルに拡大した。ソフトバンクグループと、どういうライセンスを開発しているのか。おそらくアームが新しいプロジェクトを開発して、それをライセンスとしてソフトバンクグループに提供しているのだと思うのですが、どういう開発をしているのか。

2 つ目は、アーム自身が R&D を今どんどん拡大して、従来の事業から新たにチップレットとかソリューションの事業に拡大をされている。どれぐらいのタイミングで、どういう規模の事業を考えていらっしゃるのか教えてください。

ジェイソン・チャイルド （以下「ジェイソン」）＊：まず最初のご質問ですが、この 1 年でアームとソフトバンクグループは、3 件の契約を締結しています。いずれも異なる世代のプロジェクトに関するもので、アームの IP ライセンスをソフトバンクグループに販売し、ソフトバンクグループとその投資先向けに設計支援サービスも提供しています。これらのプロジェクトの一部は Stargate にも使えるでしょうし、もちろんほかにも使えます。

それぞれのプロジェクトの具体的な内容は公表していませんが、今後 1 年くらいの間に実現に近づいた段階で詳細をお伝えできる見込みです。

次に 2 つ目のご質問についてですが、研究開発費、つまりエンジニアリングコストは大きく増加しています。その一部は先ほど申し上げたソフトバンクグループからの設計支援契約によって賄われています。また、一部は、System on Chip（以下「SoC」)のプロジェクトへの投資や探索活動に関するものです。これらもまだ正式には発表していませんが、実現に向けて進めています。このプロジェクトでは、３つのマイルストーンがあります。まずは SoC のテープアウト、そして、4〜6 カ月後にサンプルを受け取り、最後に顧客からキャンセル不可能の発注書を受領することです。この 3 つの条件をすべて満たした段階で、私たちはその SoC ソリューションの詳細を正式に発表する予定です。まだ発表の段階には至っていませんが今後 1 年以内には、これらの取り組みや提供予定の内容についてお話しできると思います。

質問者 8：1 点だけフォローアップで、SoC 向けのテープアウトというのは、ソフトバンクグループとやっているプロジェクトとは別のものという理解でよろしいですか。

ジェイソン＊：その可能性はあります。ソフトバンクグループ向けのプロジェクトについて、具体的なマイルストーンはまだ公表していません。ただし、おおむね同様の流れになるとお考えください。つまり、プロジェクトの設計が完了し、サンプルができ、顧客からキャンセル不可能な発注が入った段階で、ソフトバンクグループが正式に発表することになるでしょう。われわれがソフトバンクグループ向けに設計を行っている立場なので、発表はソフトバンクグループ側から行われることになります。

質問者 9：Stargate に関して細かく 3 つございます。一つ目は、やはりアメリカが中心ですが、サム・アルトマン氏が世界各地へ渡られて、いろいろな Stargate Project をされています。アメリカ以外でも SBG が関与する可能性があるかを伺いたい。

２つ目は、今場所の選定に時間をかけられているというお話がありました。今、各地で電力が大変不足していますので、差し支えのない範囲で、データセンターの拠点にふさわしい拠点を選ばれる中で、ボトルネックですとか、苦労されている点を開示いただければ幸いです。

最後 3 つ目は、従来から後藤さんはプロジェクトファイナンスをされるとおっしゃっています。プロジェクトファイナンスを受けてくださる方、これは日本のメガバンクで、ちょっと金利が低めとか、何％ぐらいかとか、感触だけでも示唆いただけますと幸いです。

後藤 ：まず一つ目のご質問、確かにいろいろなところで Stargate という記事が出ているのを目にしますし、将来的にはわれわれもグローバルにさまざまな関わりを持つことは十分あり得るだろうと思っていますが、まず今フォーカスするのは、北米と考えています。

2 つ目のご質問で、展開にあたって何かボトルネックがあるかというと、今はまだボトルネックがあるかどうかということよりも、Stargate Project に適したサイトをしっかりと選定して、それをプロジェクトの土台にしていくところが、今の取り組みです。これからいろいろなボトルネックも出てくるかもしれませんが、それは今後の課題だろうと思っています。

ただ、実際にやれるのは巨大な箱作りと、それに必要な電力の確保。これに尽きると思っているのです。ですから、何かほかに細かいネックが出てくるとすれば、例えば、関連する商材の納入に時間がかかるとか、チップ&システムズの方面でどうなるのかといったところが個別に出てくる可能性はあるかもしれません。

3 つ目の調達コストについては、おそらく一つ一つ、大きなプロジェクトファイナンスになると思いますから、邦銀 3 行、いずれもグローバルにプロジェクトファイナンスの豊富な経験と知見をお持ちですし、もちろん、グローバルなさまざまな金融機関、JP モルガン、その他多くの参加を想定しています。

ただ、そのコストについて、われわれとしてはもちろんマーケットスタンダードで良いわけですが、さまざまな要因でコストは上がったり下がったりするわけです。例えば、返済の蓋然性が高いか低いか、リスクウエイトによってどうしてもコストは変化しますので、現時点で一概には申し上げられないということです。ご容赦いただければと思います。

[注] ＊英語での発言内容を翻訳したものです。内容および解釈については英語原文が優先されます。